

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

地域活動の
魅力を伝える
情報誌

2015.3

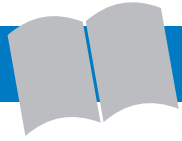


10地域 13人に聞いた 地域活動のきっかけ・魅力

インタビュー

座談会で語る「どうやって世代をつなぐ？」





読者のみなさまへ

この冊子は、大阪市社会福祉協議会が発行する
広報誌「大阪の社会福祉」の連載コーナー
「世代をつなぐ地域活動者に聞く」の別冊報告集です。
(大阪の社会福祉 第708号～第718号掲載分)
「地域活動をしている」「地域活動について知りたい」
「地域活動を支援している」というみなさまにご覧いただき、
新たな参加や担い手育成のきっかけづくりに
ご活用いただければ幸いです。

CONTENTS

2 企画趣旨 ―活動者の声に“担い手育成”のヒントを求めて―

3	住之江区 太陽地域	奥田修司さん・小川宗治さん	第708号(平成26年 5月発行)掲載
5	西成区 南津守地域	乾 亮二さん	第709号(平成26年 6月発行)掲載
7	淀川区 木川南地域	横井早苗さん	第710号(平成26年 7月発行)掲載
9	港区 築港地域	阪上眞奈美さん	第711号(平成26年 8月発行)掲載
11	東成区 東中本地域	佐藤 勇さん	第712号(平成26年 9月発行)掲載
13	鶴見区 榎本地域	中島圭子さん	第713号(平成26年10月発行)掲載
15	北区 菅北地域	太田黒貴久子さん・江村三貴子さん	第714号(平成26年11月発行)掲載
17	旭区 大宮地域	齋藤 英里さん	第715号(平成26年12月発行)掲載
19	中央区 河原地域	保呂純子さん・佐々木尚美さん	第716号(平成27年 1月発行)掲載
21	此花区 梅香地域	阪 憲明さん	第717号(平成27年 2月発行)掲載
23	座談会「世代をつなぐ地域活動者に聞く」		第718号(平成27年 3月発行)掲載
27	インタビュー&座談会からみえてきたこと		
28	地域活動の住民意識調査から		

「活動に参加する顔ぶれはいつも同じ」「担い手は変わらずに、高齢化していくばかり」…地域活動・ボランティア活動に関わる人たちの間では「担い手不足」が大きな課題として認識されています。

そのような課題意識から、平成25年に大阪市内で実施した地域活動に関する住民意識調査では、なんらかの「地域活動・ボランティア活動をしている」という人は22.7%である一方「活動はしていないが興味はある」という人は57.0%にのぼりました(28ページ参照)。地域活動に関心がある人は決して少なくないようです。

現場に目を向けると、実際、地域活動に関わる人たちも、決して高齢の方ばかりというわけではありません

地域活動者インタビュー[10地域・計13人]

- Q.1 主な活動内容と所属団体は？
- Q.2 力を入れて取り組んだことは？
- Q.3 活動を始めた理由やきっかけは？
- Q.4 あなたにとって活動の魅力は？
- Q.5 新たな参加を促すには？

座談会の開催[9地域・9人が参加]

ん。例えば「30～50代の働き盛りの年代の活動者」や「60代前半で退職後に地域活動デビューした人」など、少ないながらも、比較的若手の活動者は存在しています。

その人たちはどのようなきっかけ

で地域活動に参加し、身近な地域で活動することに何を感じているのでしょうか。その思いに耳を傾けていくことで、これからの時代の地域活動の魅力や、参加者・担い手を広げていくためのヒントが見出せるのではないか、というのがこの企画の出発点でした。

この冊子は、広報誌「大阪の社会福祉」の連載企画「世代をつなぐ地域活動者に聞く」として、平成26年度に実施した10件のインタビューと、座談会の内容を再編集して収録したものです。

新たな担い手育成のヒントを見出すべく、地域で活躍する若手活動者や、さらに次の世代を育成されている方にスポットライトを当てて、活動のきっかけやエピソード、活動を続ける中で感じる魅力などに迫りました。



インタビューの様子

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

住之江区 太陽地域

おく だ しゅう じ
奥田 修司さん (45)

お がわ むね はる
小川 宗治さん (34)

8年間途絶えていた「子ども会」を復活させた、子ども会前会長の奥田修司さん(写真右)とその後を引き継いだ現会長の小川宗治さん(写真左)にお伺いしました。



子ども会復活バトンリレー

インタビュー

住之江区

「今の子どもたちにも楽しい思い出を・・・」
「地域に恩返しをしたい」が、
子ども会復活のきっかけ

「8年間途絶えていた「子ども会」を復活させたきっかけは、何ですか？」

奥田・小川さん 私たちが小さい頃、子ども会はとても活発でしたよね。楽しかった子ども会の思い出を、今の子どもたちにも感じてほしいとの思いがそれぞれにありました。

奥田さん 町会の草むしりに参加したことがそもそもの始まりです。そこで青少年指導員から「今

度、地域のイベントで焼きそばを焼くのを手伝って」と声をかけられ、そこからたくさんの出会いがあり「子ども会」の設立を思い立ちました。

小川さん 私はこの地域で生まれ育ち、地域で遊んだ思い出がたくさんあります。ここは市内ですが、市街地から離れており、“村”っぽいいあたかさがあります。

子どもの友達から始まり、
小学校、保護者、地域社協と
協力者がひろがり

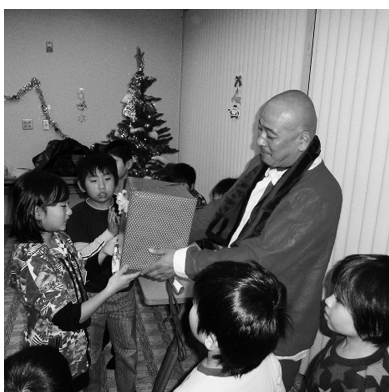
一立ちあげ当初はどうでしたか？

奥田さん まさにゼロからのス

タート。当時、わが子が小学校6年生でその友達にも声をかけたところ15人入ってくれました。それから、小学校でも子ども会の告知をさせてもらえることになり、初年度集まった子どもは50人ぐらい。

試行錯誤するなか、この地域には以前から子どもみこしがあり「子どもみこしをやらない？」という声かけをきっかけに、子ども会の存在を広くアピールしました。小川さんとの出会いも子どもみこしでした。

初年度の運営資金はわずかでしたので、資金づくりのために「南港ポートタウン祭り」で焼き鳥の屋



クリスマス会の様子(奥田さん)



親子バーベキュー大会で
鉄板と奮闘する小川さん(左)



座談会にて(小川さん)

奥田修司さんの場合

- 平成17(2005)年 ▶ 町会役員になる
- 平成20(2008)年 ▶ 青少年指導員になる
- 平成23(2011)年 ▶ 太陽の町連合こども会設立、会長になる
- 平成26(2014)年 ▶ 校下青少年指導員会代表になる

小川宗治さんの場合

- 平成24(2012)年 ▶ 町会副会長になる
- 平成25(2013)年 ▶ 青少年指導員になる
 - ▶ 子どもの小学校のPTA体育委員長になる
 - ▶ 太陽の町連合こども会設立、副会長になる
- 平成26(2014)年 ▶ 子どもの小学校のPTA地域委員長になる
 - ▶ 奥田さんから引き継ぎ、こども会会長になる

台を出店しました。わが子のためにと、たくさんの方ががんばったわけです。

地域社協から機材を貸してもらえたり、保護者に本職の焼鳥屋さんがいたりという助けられました。

声をかけるときは、“敷居を低く”

一運営にあたり、心がけていることは？

奥田さん 「例年どおり」という言葉が嫌いなんです。先輩方は「困ったら、何でも手伝うから声をかけて」と言ってくれますが、活動層の世代が離れていることもあり、新しく入ってきた人たちが、委縮してしまうかもしれない。

新しく入ってきた人たちが活動しやすいように「世代交代は、しないとアカン」ということから、役員交代は2年に1回というルールを作りました。

小川さん 強制せず、いかに参加していただけるようアプローチするかでしょう。

先ほど奥田さんから話がありました「南港ポートタウン祭り」でも「焼き鳥のお手伝いは1時間でいいから」と轻めをお願いしてみても、終日手伝ってくださる方がいるわけです。声をかけるときは“敷居は低く”だと思っています。

奥田さん 現役の親ができることをやる。寂しがるOGのお母さんがいますが、継続していくためには、新しく入ってきた人が伸びる環境を作ることが大切。

それでも、子ども会の礎を築いてくださった諸先輩方には大変感謝しています。

ひとつ卒業すると次の活動にすすむという流れ

一魅力や継続できるモチベーションは？

奥田さん 子どもを楽しませた

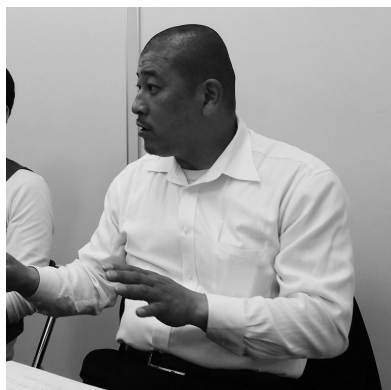
ら、ええやん。子どもが楽しく笑っていると、親も必ず笑顔でいれるということ。

現在は青少年指導員として活動しており、つながりのありがたさを感じています。

私は、子ども会の会長から青少年指導員の代表へと役割が移っていますが“ひとつ卒業すると次の活動にすすむ”という流れを、この地域で作っていきたいです。

小川さん 活動を続けていることで、街中でも子どもたちに声をかけたり、かけられたり。こういったふれあいがうれしく、励みになっています。

—ありがとうございました



インタビューで語る奥田さん



天体観測の準備をする奥田さん・小川さん

取材を終えて

新旧会長のお二人から話を伺って「子どもたちに楽しい思い出を作ってあげたい」という共通の思いや地域への愛着を持って活動されているからこそ、うまく引継ぎがされているように感じました。「ひとつ卒業すると次の活動にすすむ」という流れが地域で実現されていくと、世代交代など好循環が自然と生まれてくることが期待され、今後の動向に注目です。

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

西成区 南津守地域

乾 亮二さん (51)

地域活動とともに、介護事業所の経営、セラピードッグの派遣や区地域福祉アクションプランなど地元で幅広く活躍されている南津守地域社協副会長の乾亮二さんに伺いました。



PTA活動をきっかけとした地域との つながりと広がり

自分の子どもだけでなく
地域の子どものことを
考える

—はじめのきっかけは？

ある晩に突然、家のチャイムが鳴りPTA会長さんがいらっしゃいました。いきなりPTA会長をという話で、苦し紛れに「また考えときます」とお答えしたところ、今度は校長先生と一緒にいらっしゃいました。

これまで地域活動に参加したこともないしなあと、迷っていたところ「子どものためやし、できる範囲でがんばったら」という妻の後押しもあって、役を受けることにしました。よく考えてみると、夫婦で平日の授業参観に出ていたので、目立つ存在だったのかもしれない。

—PTAの会長をされた感想は？

私自身、子どもが大好きでやってよかったと思います。これまで一人の保護者として自分の子どもしか見えていなかったところが、地域の子どものことを広く見られるようになりました。

餅つき、お祭りなどの場でも、地域の方々が子どもたちのことを

大切にしていることをうれしく感じました。PTAに関わっていけば、子どもに返ってくることが大きい。時間に制約はありますが、付き合う人が増え、世界が広がりました。

PTAとしてやりたいことはたくさん出てきますが、予算不足など、いろいろ課題もあります。また、地域が手助けしてくれるように橋渡しするのも会長の役目だと思います。

—その後、いろいろな活動をされていますね。

PTA会長になって3年目、45歳のときに南津守地域社協の会長から「副会長にならないか」というお声かけがあり、就任させていただきました。

社協副会長になってからは、PTAとはまた違ういろいろな会議に出させてもらい、他の団体の長とも深く関われる機会をいただきました。

現在は民生委員と青少年福祉委員も務めており、最近では、地域の大運動会を15年ぶりに開催しました。最後の片づけは当日の参加者も協力してくれていました。こ

ういうこともきっかけの一つとなればと思います。

—本業での地域貢献にも熱心ですね。

本業は、介護関係の事業所「ナショナルサイアーケアネット」を運営しています。地域に関わっているなか「いま地域に一番必要なサービスは何か」と考え、平成24(2012)年4月からは新たに重度障がい者の生活介護を立ち上げました。

また、セラピードッグの派遣をおこなっていることから、1の付く日(＝ワンの日)に、小学校にラブドール・レトリバーの“ひので



南津守地域大運動会

乾亮二さんの場合

- 平成19(2007)年 ▶ 南津守小学校PTA会長になる
 平成20(2008)年 ▶ 南津守青少年指導員になる
 平成21(2009)年 ▶ 南津守社会福祉協議会副会長になる
 平成22(2010)年 ▶ 民生委員・児童委員になる
 平成24(2012)年 ▶ 玉出中学校PTA会長になる
 平成26(2014)年 ▶ 南津守地域大運動会開催
 ▶ 南津守青少年福祉委員になる

君”と一緒に訪問しています。“ひので君”の同行者は私たち夫婦。犬を連れていらっしゃる方が子どもたちに話しかけやすいというメリットもあります。子どもたちからは「犬のおっちゃん」や「先生」と呼ばれることも。地域を歩いていても、向こうからあいさつされることがよくあり、悪いことはできないなと思います(笑)

思いをつなぐ 世代間のパイプ役

―活動の中で心がけていることは？

地域で活躍されている役員の方の大半は、PTAの経験があり「私の頃はこうだった」という意識もあってか、PTAの方と地域役員の方には、地域活動に対する考え方、世代間の感覚の差によってギャップを感じるケースもあります。

でも、みなさん、子どもたちを思う気持ちや、地域をよくしたいという思いなど、見ている方向は

同じなんです。

そこで、その力を合わせて、子どもたちに楽しい思いをしてもらうためには、世代の間に入るパイプ役が必要と考えました。PTAと地域のベテラン層の方の橋渡し役としてワンクッション要るなと思ったときには、それぞれの意見や思いを聞きに回るようにしています。双方の思いを受け止めたうえで、その思いを相手方に伝える。そうした心がけによって、やがて雰囲気もよくなっていきます。

区域の役も経験できたことで、他の地域の状況も分かり、参考にしながら、自分たちの思いをどううまく伝えていくかということに気を付けています。

PTAでの経験は原点であり、財産

―より多くの人に地域活動に参加していただくには？

「地域のお手伝いをしたいけど、どこに相談したらいいのかわから

ない」という声をたびたび耳にします。いきなり町会長や地域の役員に相談というのは敷居が高いのかもしれませんがね。個人的には、そういった何かしたいという思いを集約し、活動につなげるしくみが必要だと感じています。思いをくみ取る受け皿、つなぐ人、地域で声をかけやすい人は必要ですね。

「ちょっとぐらいやったらできる」という人はたくさんいると思うので、行事にいろいろ参加してもらって、きっかけをつくっていただいて、体験してもらうことが大切。そして地域の魅力を伝えていきたいです。

PTAでの経験は私にとって、原点であり財産です。まちのことをよく知れるし、いろんな人との出会いやつながりが広がります。「やって損はないよ!」と、ことあるごとに話すようにしています。

―ありがとうございました。

取材を終えて

乾さんの穏やかな人柄に触れ、地域に対する熱い思いをお聞きすることができました。「PTAでの経験は原点であり、財産」という言葉があり、その経験をもとに世代間相互の気持ちを汲み取る乾さんのようなパイプ役が、地域活動のなかに必要であることをあらためて感じました。



座談会にて



南津守子どもデー

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

淀川 区 木川南 地域

よこ い さな え
横井 早苗さん (52)

淀川区木川南地域の子育てサロンや高齢者食事サービスなどで活動する民生委員の横井早苗さんにお伺いしました。



大丈夫。何とかなるから!

はじめは、ある民生委員さんの熱心なお誘いから

―地域活動に参加されたきっかけは何ですか？

子どもが小学5年生のときにPTAの広報委員長をしたことが始まりです。

その後のつながりは、PTA役員OBなどが集まる「南友会」で、ひとりの民生委員さんに声をかけられたことです。「あの書道教室の習字の先生って横井さんのことだよね。この顔を覚えておいてね」と。

それから、その民生委員さんは夏の暑い日に何度も足を運んでくださり「子育てサロンのお手伝いをしてもらえない？みんなでフォローするから。子どもはかわいいよ」と熱心に話してくださいました。

はじめは、なんと言ってお断りしようかと考えていましたが、下の子どもも無事に中学受験を終えたタイミングでもあり、もともと子どもが好きだし、子育てと同じ要領かなと思いやってみることにしました。

関西のノリ・ツッコミと先輩方のやさしさやアドバイスに助けられながら

―子育てサロンに入った感想は？

民生委員として活動し始めた後、研修を受けて子育てサロンの活動に加わりました。

最初はみなさんの輪に溶け込めるのかが心配でしたが、子どもと一緒に遊んだり、他の先輩方と言葉を交わしているうちに自然に馴染んでいました。

わが子が大きくなってから、小さい子どもの世話をするのは、どこか懐かしく楽しいものです。サロンを利用するお母さんから相談を受けたとき「大丈夫。あつという間に大きくなるから」と話すこともあります。

私も主人も横浜出身で、大阪にやってきて、子どもが熱を出したときは、あれこれ悩みましたので、お母さんたちの心配もわかります。

横浜出身の私にとって、関西の人たちのおしゃべりは漫才を聞いているかのようにおもしろく聞こえることがあります。

例えば子どもが悪いことをしたとき、自分の子どもでなくても「ア

カン!」とビシッと怒るのだとか。

街を歩いている子どもをいきなり抱っこすることはできませんが、サロンなら子どもたちとたくさんふれあうことができます。みんなの笑顔を見ていることが好きだし、幸せを感じます。

―一心に残っているエピソードは？

見守り活動の一環として、高齢者のお宅にお伺いすることもあります。地元ではないので、長年暮らしておられる地域の人たちの顔と名前がわからず、最初は困りました。

先輩の民生委員に相談をしたら



ふれあい喫茶のスタッフたちと
(中央：横井さん)

横井早苗さんの場合

- 平成18(2006)年 ▶ 娘の幼稚園のPTAの本部役員になる
 平成22(2010)年 ▶ 娘の小学校のPTAの広報委員長になる
 平成23(2011)年 ▶ 民生委員・児童委員となり、地域活動に携わる
- ・木川南子育てサロン(どんぐりクラブ)
 - ・高齢者ふれあいお食事会
 - ・ふれあい喫茶サロン
 - ・高齢者いきいき教室
 - ・子ども見守り活動

「訪問に抵抗がある人もいるから、あなたの方から、ふれあい喫茶やいきいきサロンに来たらええねん。顔と名前を覚えるいい機会よ」とアドバイスを受けました。

確かに、高齢者食事サービスやお花見、敬老会など、地域の人たちの名前を覚える機会はいっぱいありました。困っていたことが案外スムーズに解決できることもわかりました。

また、高齢者食事サービスでは、それぞれ分担を決めて大量の食事を調理するのですが、しいたけを焼くとき「どれくらい焼いたらいいですか?」と聞いたら「裏に汗かいてきたら」と。見てみると、本当に水滴が浮いてきて、これは勉強になりました(笑)大量の食事を作っていると、家庭の食事の準備が簡単に思えてくるから不思議です。

私は小さい頃、明治生まれの祖母と一緒に暮らしていました。訪問や食事サービスなど活動が続け

ていくなかで「おばあちゃんの手もこんな感じだったな」と懐かしく思い出すことがあります。

懐に飛び込めば、みなさんとてもやさしく接してくださいます。

利害関係なく付き合える “人とのつながり”は 心を豊かにしてくれる

—活動を続けていく魅力は何ですか?

何もしていなければ子ども中心の人間関係だけでしたが、活動を通して幅広い年齢層の方と知り合うことができました。

ありがたいことに、主人も地域活動に理解があり「楽しそうだね」と声をかけてくれます。

今は核家族化が進み、お姑さんから教わるという経験も減ってしまいました。活動しながら年長者からいろいろ教えてもらいうい機会にもなります。

—地域活動から得たものは?

利害関係なく付き合える“人とのつながり”は心を豊かにしてくれます。

私は書道教室を週に2回、そのほか、高校3年生と中学3年生の子どもPTAもしていますが、ちょっと忙しいぐらいの方が、日々充実するものだと感じています。時間が余っていると、かえってぼんやり過ごしてしまうことがあります。

PTAは子どもが通学している期間だけですが、地域活動は終わりが無いというイメージがあるのかもしれませんが。

でも、みなさんとてもやさしくしていただき、それほど難しくはありませんよと伝えたいです。ボランティアをやっている人に悪い人なんていないと思います。同世代の人がもっといたら、さらに楽しいのに(笑)

—ありがとうございました。



子育てサロンの様子



高齢者ふれあいお食事会

取材を終えて

横井さんのフレンドリーな雰囲気、周囲の人とのつながりを広げる要因のひとつだろうなと感じました。

また、活動の経過をお伺いする中で、一緒に活動してくれる若い世代を引き込んでいく・受け入れていく・応援していくという地域の度量の大切さも伝わってきました。

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

港区 築港地域

さか がみ ま な み
阪上 真奈美さん (58)

PTA主催の茶道教室の講師や、更生保護女性会活動などさまざまな地域活動に参加しておられる阪上真奈美さんにお話を伺いました。



やりたいことがあればまずは関わっていろいろ

茶道の師範の経験を活かして

―地域活動への参加のきっかけは？

上の子どもが小学2年生のときに学校から「大阪市の人材バンクに登録しませんか？」という内容のチラシを持ち帰ってきました。「お茶」と「お花」の講師で登録をしようと考えました。そのとき、小学校の校長先生に「まずはうちの学校で土曜日に教室を開きませんか？」と、声をかけていただいたことが始まりです。ちょうど、ゆとり教育で土曜日がお休みになった頃のこと。PTAの総務委員会の主催として、以来、夏休みの期間以外14年間、ずっと茶道教室を続けさせていただいています。

―なぜ人材バンクに登録しようと思ったのですか。

結婚前、私は華道と茶道の師範の免状をそれぞれ取得し、自宅で教室を開いていましたが、子どものこともあり、5～6年間やめていました。師範として再度教室をするのは大変ですが、子育てをしながらボランティアで特技を活かしたいと考えたことが地域活動の第一歩になりました。

小学校に顔を出すうちに「PTAの役員に」と声がかかり、小学校で2年

間、中学校で1年間PTA会長を務めることになりました。そのほか更生保護女性会や民生委員活動などもしています。

―活動することの魅力は？

自分の興味のあること、好きなことを地域活動のなかで叶え、つなげていけることが魅力だと感じています。港区社協さんとは「子育てサロンのボランティア保険をかけたい」ということで訪れたことがきっかけで知り合い、最近、職員さんが「港区社協のゆるキャラである『くしゃきょん』の歌を作りたい」と切望していることを知り「ヨーデル食べ放題」で有名な作詞・作曲家のリピー特山中さんに「『くしゃきょん』のテーマソングを作ってもらえないか？」と働きかけました。山中さんとのご縁は、PTA会長をしていたとき講演会をお願いして以来で、平成26(2014)年2月の更生保護女性会と保護司会による合同研修会でも山中さんをお招きし、そのときに「くしゃきょんソング」を作ってほしいと突撃し、快く受けていただけたことになりました。

その際に、築港のイメージソングの依頼もしました。

―活動している中での魅力は、例えば自分の関心をとりいれられるということでしょうか？

そうです！まさにそれです。だからPTAの人にも言うのですが、私は自分がやってみたいことがあれば、委員長でも会長でも“長”への就任をすすめています。

そうすると、実際「今度委員長になったんです。これをやっています」と教えてくださったり。長にならなくても、やりたいことがあれば、まずは関わっていくことですね。あわせて、「無理をしないでね」とも言っています。

―無理にではなく、主体的に楽しく関わってもらうことを心がけているのですね。

自分だけが前に出るのではなく、みんなでやっていこうという気持ちです。声をかけるときは「私と一緒に楽しんで！」という気持ちです。無理強いはいみんな嫌だと思いますから。

活動ができるのも私だけの力ではありません。夫や家族の理解・協力もありますね。一番の応援者で、行事のとき荷物を運ぶなど、バックアップしてくれます。

阪上眞奈美さんの場合

- 平成14(2002)年 ▶ 長男の小学校のPTA役員になる
 平成15(2003)年 ▶ 主任児童委員になる
 平成20(2008)年 ▶ 次男の小学校のPTA会長になる
 平成24(2012)年 ▶ 次男の中学校のPTA会長になる
 ▶ 更生保護女性会でほっこり広場を開始する
 平成26(2014)年 ▶ 地域活動協議会の会計になる

「これまで地域活動に参加していない人が、新たに参加するようになった経験はありますか。」

習字や茶道などのおけいこにきている子どもに、生涯学習ルームで「エイサーと一緒に踊らない?」と声をかけたことがきっかけで、保護者の方も参加してくださり、そこから更生保護女性会のメンバーや主任児童委員が誕生したりと、うれしいつながりが生まれました。

地域に新たな拠点が誕生

「この場(ほっこり広場)はどのような経緯で誕生したのですか?」

平成24(2012)年6月に、私たちの地域にいつでも気軽に立ち寄れる場をつくらうという更生保護女性会の幹事長の思いから「ほっこり広場」が生まれました。もともとは休業した築港温泉の脱衣場を間借りしたことから始まりました。1年後、オーナーさんのご厚意で今の場所に拠点をオープンできました。地域活動協議

会(以下、地活協)の事務局でもあり、地活協が受託した「広報みなど」を地域に配布する事業の作業場にもなっており、若いお母さんたちに有償活動として作業を担ってもらっています。毎月21日開催の「ほっこり広場」での世代を越えた交流の場としても、いろいろな人が集まっています。

「資金集めもされているとか。」

奈良の当麻寺に行ったとき、途中の「道の駅」で、奈良県の地場産業製品である靴下と出会い、バザーで販売することを思いつき、活動資金にしています。地域活動に、それぞれが負担を感じることなく、関わるのが大事だと思います。「ボランティアなのに、なぜ自腹で年会費を払わなあかんの?」という若い世代からの疑問を耳にし、資金づくりのために区内のイベントでミルクせんべいやスーパーボールすくいなどの店を出店し、売り上げを活動費に充てるなど、みんなで個人の負担をなくす努力を続けています。活動メンバーは、

現役のPTAでがんばっている若いお母さんたちが多く、子どもが大好きです。店番も、子連れウェルカム。「無理しないでいいから、1時間でも遊びに来て」と声をかけることがあります。

「ボランティアを続けられる秘訣やメッセージをお願いします。」

何かをしたいときは、まず地活協の会長や更生保護女性会の幹事長などに相談しています。すごく応援してくださいます。

私自身は世代間のギャップというのをあまり感じたことはありません。逆に若い人のほうがしっかりされていて、助けてもらっています。みなさん忙しい中ががんばっているので、できる範囲でいいと思います。そのときに一緒にやれる方とやるのがあって、グループがあると楽しいのでは。そこで話し合える人が必ずいる。賛同してくれる人も必ずいます。

「ありがとうございました。」

取材を終えて

とても楽しいインタビューでした。阪上さん自身が楽しんで活動されている様子がよく伝わってきて、こちらが元気をもらいました。一緒に活動してくれる人を増やす、さらに若い世代を引き込んでいくパワーを感じました。



インタビューを実施した「ほっこり広場」



座談会にて

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

東成区 東中本 地域

佐藤 勇さん (41)

小学生と中学生の娘の父親であり、現役のサラリーマン。働き盛りでありながら、地域で新たな喫茶活動を立ち上げた佐藤勇さんに、活動の経過や喫茶にかける思いを伺いました。



若い世代も案外、自分の住む地域が好きなんです

インタビュー

東成区

企画する楽しさに のめりこんだ一年目

ー佐藤さんが地域活動に関わり始めたきっかけは？

ある日、突然、PTAの副会長さんから電話があり、「PTAの保健委員長をやりませんか？」との依頼がありました。受けたときは、妻へのお願いかな？と思ったのですが、自分への依頼と聞いてびっくり。とりあえず聞いてみると「みんなで協力するから、佐藤さんには『ふれあいスポーツデー』と『秋の親子遠足』をメインで企画してほしい」と。自分でアイデアを出してできるのならと引き受けることにしたのがきっかけです。

私自身、小さい頃は両親が共働きで、授業参観などにあまり来てもらえなくて。わが子のときには極力行ってあげたいと、学校行事によく顔を出すようにしていたため、声がかかったのかもしれません。

ー保健委員長になられて、イベントはいかがでしたか？

初めての行事は「ふれあいスポーツデー」でした。ちょっと変わったことをやりたくて、カバディという鬼ごっこのような遊びをしましたが、子どもたちの收拾がつかずに大

混乱…。

秋の親子遠足では「みかん狩り」を企画し、これは大成功でした。みかん農園の下見、農園の方との打合せ、バスの手配など段取りをして。一番こだわったのが、みかん農園での宝探しゲーム。子どもたちに気付かれないように折り紙で作った宝物を100個ぐらい隠して…これが盛り上がりましたね。

ーご自身で企画されての感想は？

子どもの喜ぶ顔が見られるのはもちろん、保護者も先生もみんなが笑顔になれる。この反応はうれしかったですね。

一方で、楽しくてのめり込みすぎたところもあって…イベントの3日前からほぼ徹夜状態で下準備に打ち込んだこともありました。普段はサラリーマンをしているのですが、仕事に支障がなかったとは言えません(笑)

子育て世代から 地域に恩返しをしたい

ーその後、活動の転機は？

小学校のPTAを1年した後、同じ敷地内にある幼稚園のPTA会長をすることになりました。その頃、幼稚園民営化の話が浮上。廃園の候補に

あがってしまい、署名活動などをおこないました。

この活動の中で、私は、これまで以上に地域のことをよく知ることができ、後々お世話になる地域の役員さんともお知り合いになることができました。何より、子どもたちが地域のみなさんにいかに見守られているかを感じました。

ーその思いは、以後の活動にどうつながっていききましたか？

翌年は、再び小学校のPTA役員になりました。担当した成人人権委員会では「子育て世代が地域に恩返しをできないか」と考えて、地域のふれあい喫茶に親子で行けるようにチ



心笑喫茶のぼりと佐藤さん

佐藤勇さんの場合

- 平成23(2011)年 ▶ 東中本小学校PTA保健委員長になる
 平成24(2012)年 ▶ 東中本幼稚園PTA会長になる
 平成25(2013)年 ▶ 東中本小学校PTA成人人権教育委員長になる
 平成26(2014)年 ▶ 東中本小学校PTA副会長になる
 ▶ 1月 任意団体「心笑フレンズ」設立
 ▶ 2月～ 心笑喫茶オープン

ケットを配布しました。

ーその後、ご自身でも喫茶を立ち上げられたそうですね。

平成26(2014)年1月、既存のふれあい喫茶とは別に、新たに「心笑(こころみ)フレンズ」というグループを結成して、2月から心笑喫茶をスタートしました。スタッフはこれまでの活動で知り合った子育てママさん。PTAなどのつながりから、協力してくれそうな5人に声をかけて集まってもらい、私から「子育て世代から地域に恩返しをして、自分たちも楽しめるような活動をしたい」と呼びかけたのが始まりです。その後「私も手伝っていいですか」と声をかけてくれた2人が加わり、7人で運営しています。

参加者は親子連れから、地域の高齢の方まで、幅広い世代が参加しています。メニュー表は子どもの手作りのイラスト入りにしたりと工夫を凝らしています。

当初、運営費は自腹で負担していましたが、今は地域社協からの補助金もいただきながら運営しています。

喫茶活動での気付きとこれからの可能性

ー喫茶運営のモットーは？

「スタッフも楽しいし、楽しみたい」「できる人が、できるときに、できるだけ」ということを大切にして、チームワークで運営しています。

ちなみに喫茶の名称である心笑は、「心が笑う」と、いろいろと「試みる」をかけて名付けました。

ー喫茶活動を通しての気付きや感想は？

みんな口にしなないけど、住んでいるまちにそれぞれ愛着を抱いています。この活動を通して感じているのは、若い世代の人も案外、みんな自分の住んでいる地域が好きだということです。

喫茶という場は、誰もが気軽に立ち寄れる。演奏やパフォーマンスをする人も呼べる。この場をきっかけにして、人と人とが出会い、アイデアが浮かび、何かが生まれる。喫茶はそんな可能性のある場だと感じています。

ます。

ー若い世代が地域で活動するには何が大切だと感じますか？

若い人が地域行事に入っていくのはなかなか簡単ではないかもしれませんが、でも「ちょっとだけでいいから来て」と言って顔を出してくれた人も、自分のすることで誰かに喜んでもらえる、やっぱりうれしいんですよね。そこから、もっとやってみようかなという気持ちが生まれたり、ちょっとずつ心が開いてくるのではないかと思います。喫茶活動も、若い人が地域に目を向けるきっかけの一つになればと考えています。

それと、仕事とボランティアのバランス感覚も大事ですね。みんなの反応がうれしくて、活動にのめり込み過ぎた時期もありましたが、今は「この辺りでセーブしておこう」という頃合いを考えて「ほどほど」を意識してやっています。

ーありがとうございました。



心笑喫茶イベント
アコーディオン演奏



心笑喫茶
スイーツデコデコ講座チラシ

取材を終えて

佐藤さんが語る「企画する楽しさ」「反応のうれしさ」に、機会さえがあれば地域活動にハマる人はもっと増えるのではと感じました。「若い人も自分の地域が好き」ということばは、言われて初めて気付くところがあり、その気持ちをくすぐる仕掛けを考えてみたいと思いました。

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

鶴見 区 榎本 地域

なか しま けい こ
中島 圭子さん (53)

地活協の広報委員をされている中島圭子さんにお話を伺いました。



一生懸命活動していることを、 一生懸命に伝えたい

インタビュー

鶴見区

「子どもの学校のために 何かしよう」とPTA役員に

—地域活動への参加のきっかけは何ですか？

小学校のPTA活動が入口です。子どもの学校のことなので、何かしなければと学級委員になりました。子どもが小学校3年生のときには本部役員になり、榎本地域との関わりが始まりました。

—学級委員になったきっかけは何ですか？

子どもが通う学校のお手伝いができればという軽い気持ちでした。その時点では、どちらかといえば、地域との関わりは薄く、わが子の面倒より地域活動を優先するのには疑問もありました。本部役員になり、榎本社協の会長と直接の関わりができました。青色防犯パトロール(青パト)や老人会の見守り活動で、子どもがすごくお世話になっていたので、PTAでも何かできないかと声があがり、見せる防犯活動として「愛ガード」を立ち上げました。本当に続けられるかと不安に思っていたとき、会長に「できるときにできる範囲でやってくれたらええねん」と言われ、気持ちがずっとなくなりました。今は無理をせず、いつか違う形ででも返していければいい、と。その言葉が今も効いています。

—その後は？

子どもが5年生までPTA活動をしていましたが、その後はちょっとおとなしくしていました。5年生の終わり頃に「地域の仕事してや」と言われたけれど「忙しいので」とお断りして。卒業直前にPTAの先輩、元副会长より「地域のロゴマークを作ってもらえないか？」というお電話がありました。当時PTAのポスターを年賀状の素材集などを使ってWordで作っていましたが、そんな活動が目にとまったようです。

「できるときにできる範囲で」

—広報委員としてどんな活動をされたのですか？

はじめは、平成21(2009)年4月に区民ホールで開催された「はなてん音楽サロン」のJazzコンサートのポスター制作に取り組みました。「『できるときにできる範囲で』と言われていた時期がよいよきたな」と感じました。

町会の役員ではない立場で、活動に参加するようになり、ポスター、チラシ制作を中心に担当することになりました。

Twitterは、平成22(2010)年10月に開設しました。地域の公開井戸端会議「あいより」の雰囲気を変えたくて、発言内容をツイートすることも始めまし

た。Twitterの開設からずっと続けているのが「榎本の空」のツイートです。毎朝、自宅や近辺から撮った空の写真を流しています。

また、平成23(2011)年からは榎本地域のFacebookページも開設し、榎本だけでなく、鶴見区の地域情報や地活協の活動などをなるべくシェアするように心がけています。ブログも、女性会や青パト日記など、投稿してくださる委員会が増え、情報の幅も厚みも増していると感じています。

—活動をする中で気付いたことなどはありますか？

広報活動ではイベントや講演などの写真撮影をすることが多いのですが「私は撮らないで」という方も、中にはおられます。その意志を伝えるためにも、区社協の広報勉強会で、わかりやすい目印を付けることの重要性を教わり「PRESS」という腕章を付けて撮影をおこなうことにしました。そして、できるだけスピーディーに情報発信できるよう心がけているので、イベント当日は、たいてい徹夜になります。

周囲の人に支えられる中で 自由に活動できた

—PTAのときから考えると、すごく地域

中島圭子さんの場合

- 平成16(2004)年 ▶ 娘の小学校のPTA本部役員になる
 平成21(2009)年 ▶ 榎本社協の広報委員になる。榎本ECOLOGOマーク作成
 平成22(2010)年 ▶ 榎本Twitter、Ustreamチャンネル開設
 平成23(2011)年 ▶ YouTube「The Enomoto22」チャンネルスタート
 ▶ 広報誌「ふれあいえのもと通信」創刊
 ▶ 榎本Facebookページ開設
 平成25(2013)年 ▶ NPO法人榎本地域活動協議会理事に就任
 ▶ ホームページリニューアルに伴い、Flickr(写真)、Tumblr(ブログ)などの運用サイトを併設、運営
 平成26(2014)年 ▶ 広報委員会定例化、広報講習会開催

活動に関わっておられますね。

なんでこうなったのかな(笑)何を始めても怒られなくて、常に新しいことに挑戦させてもらえました。Facebookもたくさんの人に投稿してもらってシェアできたらなあ。いろいろなことを地域みんなで喜べたらと思います。

一どのあたりから地域活動に気持ちが高まってきたのですか？

Twitterで、意外なところから反応があったりしてうれしかったかな。「地域活動としては新しいことだよ」と。やってみないよりは、やってみてダメなら考える。お手本がないからやりやすかったのかもしれない。「こうしないといけない」とか「これはあかん」と言われることなく、自由にさせてもらいました。私を地域活動に引き留めたのは「自由」かもしれません。それを周囲の方がしっかり支えてくださっています。

一サポート体制あつての「自由」なのですね。いろんな方に地域活動に参加してもらったり、活性化するには、どうし

たらいいと思われませんか？

例えば、団塊の世代の方への呼びかけで開催した映画会は、企画を考えるとワイワイやるのが楽しかったです。町会や委員会の役員でない方が「楽しそう!」と思えるイベントを通じて、仲間に入る機会をつくるのが大事なのではないでしょうか。また、来ていただいた際の役割などもあらかじめ考えておけたら、来た方も活動しやすいかもしれません。

一広報活動の魅力をどう思われますか？

イベントなどで、写真を撮りまわる広報は、他の委員会のように、何かブースを受け持ったりすることはないんです。みなさんが笑顔で、一生懸命活動していることを、一生懸命に伝える、そこが私の役目です。広報活動をするまで、地域でこれだけ多くの活動がなされていることを知りませんでした。

広報では、目の前で地域がよくなっていく様子を体感できます。例えば、自転車整理を取材したら、目の前で駅前がすっきりしていく、通行している人と交

わすあいさつが見られる、そして関わりを持った人が「ちょっと手伝おうか」と広がっていく…まさに今、目の前にあることを追ひ、みんなに伝えられること、それが広報の醍醐味です。

一これからの地域について、感じておられることはありますか？

他市の取組みで「今、子どもたちの見守り活動を続けている高齢者が、もし認知症になって徘徊が始まったとしても、子どもたちが顔を覚えていて『うろうろしていたよ』という声がきっと集まる」という話を聞きました。「逆見守り」ですね。なるほど、顔がわかったら、声をかけられるわ、と。TwitterやFacebookも続けることで、いつも「いいね!」を押してくれる人が押さなかつたら「あれ?」と思えるようになるかもしれない。SNSでの緩いつながりがひとり暮らしの高齢者の生活を見守ることができるかも知れない、とか。高齢化のすすむ地域なので、いろんなことを考えたりしています。

一ありがとうございました。



写真講座「いいね!のとれる写真術」
(右: 中島さん)



大運動会で撮影する中島さん

取材を終えて

はじめは地域活動に積極的ではなかつたという中島さんでしたが、今では榎本のさまざまな活動の魅力を自由な目線で伝える広報の要に。「榎本の空」のツイートやポスター制作など、中島さんの広報を見ても、中島さんの丁寧さ、一生懸命さといった思いがあふれていると感じました。

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

北 区 菅北 地域

おお た ぐろ き く こ
太田黒 貴久子さん (48)

え むら み き こ
江村 三貴子さん (47)

北区菅北地域で、PTAから青少年指導員、地活協と同じ流れで活動されている太田黒貴久子さん(写真右)、江村三貴子さん(写真左)にお伺いしました。



世代交代ではなく、 踏襲してつないでいきたい

小学校90周年行事が 地域を知るきっかけに

ーお二人が地域活動に関わり出したきっかけは？

太田黒さん 子どもが小学生のとき、前任のPTA役員に声をかけられたことがきっかけです。

江村さん 私も同じです。「いつかはやらないと」、思っていたところで、タイミングよく声をかけていただきました。これがなければ、地域活動の関わりはなかったかもしれません。

ーPTA活動で思い出に残っていることは？

江村さん 平成23(2011)年11月開催の菅北小学校創立90周年の記念式典ですね。当時、下の子がそれぞれ5年生と4年生で、太田黒さんが副会長、私が書記でした。

太田黒さん 記念行事があったから、PTA活動にどっぷりつかることになりました。そのとき、子どもたち向けのサイエンスショーを企画して大好評でした。子どもたちは非日常が大好き。体育館を真っ暗にただけで、大喜びして「そこから、はしゃぐかー」って感じてました。

金子みすゞの詩を朗読するステージでは、江村さんがスライドに合わせ

て朗読。ピアノの先生をしているPTAが伴奏してくれました。すべてが手作りで、思い出に残っています。

周年行事とあって、OBの方もたくさん。地域の大先輩と接することができ、小学校と地域のつながりの強さや、地域のことを知るきっかけになりました。

ーみなさんの特技も活かされたのですね。PTA役員をしてみても感想は？

太田黒さん 「PTAは大変やったけど、やってよかった」というのはみなさん言いますね。最初は絶対しないって敬遠していた人もそう言います。もちろん、私もやってよかったと思うし、心から言えるから、次の人も「そうかな？」と考えてくれるのかもしれない。

江村さん PTAは「誰とやるか」「いつやるか」というのも実は重要ですよね。どうしても相性があるので、一緒にやって楽しい人同士かどうか。

太田黒さん PTAの4役(会長、副会長、書記、会計)は、地域の登竜門みたいなもの。私たちがPTAでドタバタしているのを誰かがちゃんと見ていて、タイミングよく「今度は青少年指導員、どや？」と声をかけられるわけです(笑)

江村さん そんな流れで、太田黒さんとはPTAで一緒になって、その後も示し合わせたわけではないけれど、今も一緒です。

工夫がいっぱいの 広報活動

ー現在の活動を教えてください。

太田黒さん 二人とも地活協の広報委員になって、「Dearかんぼく」という広報紙を発行しています。菅北の地域活動に参加してもらいたい、知ってもらいたいというのが目的。また、町会に入っていない人へのアプローチもあります。

委員は、不動産業、司法書士、医師など、それぞれの仕事をしながらも、プロならではの得意分野や関心事、各種団体とのネットワークを活かして、企画・取材・編集をしています。

ーお二人も取材をされるのですか？

江村さん そうですね。私は、青少年指導員の欄を担当していて、正月の餅つきや、一泊二日のサマーキャンプをレポートしました。

太田黒さん 取材をしてみると、なんとなくしか知らなかったことをよく知れますね。

太田黒貴久子さん・江村三貴子さんの場合

平成20(2008)年 ▶ 太田黒さん 子どもの小学校PTAの役員になる

平成21(2009)年 ▶ 太田黒さん 青少年指導員になる

平成23(2011)年 ▶ 二人ともに小学校PTA役員になり90周年行事の運営に携わる(太田黒さん:副会長/江村さん:書記)

平成24(2012)年 ▶ 江村さん 青少年指導員となる

平成25(2013)年 ▶ 菅北地域活動協議会の広報委員となる

ー広報委員会として工夫されていることはありますか？

江村さん 編集会議は、毎回、参加者全員にFacebookとメールで議題を発信しています。会議後の議事録も同じ方法で共有しています。これで参加できなかった人も情報共有ができて、当日の話し合いもスムーズになります。

菅北地域は都会のなかの下町。地域との関わりが薄く孤立してしまっている人にも「Dearかんぼく」を届けたいと、配布方法は町会それぞれが工夫してくれています。町会長さんが手渡ししたり、商店街のなかのお店に置かせてもらっているところもあります。町会に入っていない人の目に留まるような募集記事を出せないかと、みんなで検討中です。

太田黒さん 現在、ホームページも立ち上げ作業中ですが、担当は、江村さんを含めて3人。プロジェクトメンバーで話し合った案を、公開する前にみんなで相談します。私はユーザー目線で意見を言うのが役割です。

二人それぞれの地域活動の魅力

ーお二人にとって地域活動の魅力や原動力になっていることは何ですか？

太田黒さん 地域でがんばる先輩方の存在は大きいですね。広報紙についてなど、お褒めの言葉はうれしく「みんな喜んでいるよ、ありがとう」って言ってもらえるとまたがんばろう！と思えます。

ー喜んでもらえることが、ご自身の喜びになっているんですね。

太田黒さん そうですね。活動を通して、まちですれ違うだけだった人と知り合えたのもうれしいですし、あと、飲み会は地域活動の大切な潤滑油です(笑)子ども会や青少年指導員などの枠を超えて集まるので、何かあったときの協力関係が自然とできています。

ー江村さんはいかがですか？

江村さん 私の場合は、仕事とはまた

違った居場所や活躍する場があることですね。普段は会社勤めをしていますが、地域でホームページを立ち上げるようになったとき、未熟な経験しかありませんが「ここでならできるかも」と思い、生涯学習のような気持ちで挑戦中です。

ー最後に、今後への思いを聞かせてください。

太田黒・江村さん 地域の見守り隊のみなさんは、雨の日も風の日もグリーンのジャンパーを着て子どもの見守りを続けてくれている。見えないところで淡々とがんばってくださっている姿に頭がさがり、泣きそうになったことがあります。先輩方の活動を、世代交代ではなく、踏襲してつないでいきたいです。

ーありがとうございました。



若狭キャンプ飯ごう炊さん
(左奥:江村さん/右奥:太田黒さん)



琵琶湖キャンプ集合写真

取材を終えて

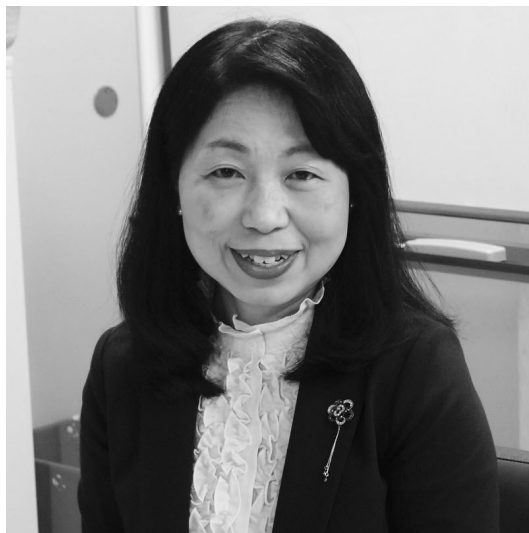
ペアでのインタビューを希望されたお二人。話を伺って、二人一緒だからこそ、こうして今まで活動して来られたのかなと感じました。一方、同じ活動をしながらも、魅力を感じるポイントには、それぞれの個性が表れていたのも興味深かったです。

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

旭区 大宮地域

さいとう えり 齋藤英里さん

旭区大宮地域で、子ども・子育て支援活動をはじめ、区の音楽イベントでもご活躍の齋藤英里さんにうかがいました。



知っている人を知っていることで、 どんどん広がる

子どもたちの心に 寄り添って

—まず、地域活動に関わり始めたきっかけを教えてください。

子どもが幼稚園のとき、先生から「雨の日だけでいいから、通園のサポートをしてもらえないですか?」と声をかけられました。子どもが年子で、何かとお世話になることも多かったのですが、私にできることなら、という思いで始めました。

—お子さんが小学校にあがられてからは?

いくつかPTAの役をして、広報などを担当しました。副会長も2年間務めました。そこで地域のつながりが大きく広がりました。

さらに、当時発足した主任児童委員になってほしいと声をかけられて、引き受けることに。学校との連携も必要なので、PTA経験者に担ってほしいという意向があったようです。「服装に汚れが目立つ子がいる」「夜、外で遊んでいる小さい子が気になる」といった相談を受けては、学校や児童相談所と連携しながら対応していましたね。

—その後はどのような活動を?

娘の中学校卒業と同時に、中学校の「心の教室相談員」になりました。これは、暴力行為、不登校、いじめなどの問題を背景に、「心のケア」が必要であろうと全国の公立中学校で始まった取り組みでした。活動は、週に3回・午前中。中学生にとって、先生でも親でもない第三者的な存在として、生徒たちの相談を受けました。「心の教室」に訪れるのは、ひとり孤立しているような女の子が多かったです。

その後、民生委員として、地域で子育てサロンの立ち上げにも関わりました。

学び・経験・ネットワークを 活かして新たな活動へ

—地元地域以外でも活動されているのですか?

大宮地域での活動のほかにも、区のイベント「旭ミュージックフェスタ」にも関わっています。立ち上げ当初、出演者が少なかったことからハーブを2回演奏しました。習いたてだったので「ええから出て」という感じで頼まれて(笑)

その後「PA(音響)のスタッフが足りない」と聞いて、全6回の音響の講座を受け、現在は音響スタッフを

担当しています。

—講座を受けてPAまでされるとは…かなり専門的ですね。

もともと機械を使うことが好きだったんです。ほかにも、これは有償の活動ですが、区民センターでパソコンを教えたり、障がい者にパソコンを教えることもあります。

わりと習うのは好きなのですが、そのことを話すと「ちょっとやって」という感じで、実践する機会もついてきましたね。

—新たな学習支援の活動にも取り組まれているそうですね。

平成26(2014)年度に始まった、旭区社協が受託する「あさひ学び舎事業(中学生のための生活・学習支援事業)」では、これまでの経験やネットワークを活かせたらと思い、教える側のボランティアのとりまとめ役として、コーディネーターを務めています。場合によっては私が教えることもあります。

—本当に多彩な活動をされていますね。活動の原点になっていることはありますか?

私は大阪市立大学 生活科学部の

齋藤英里さんの場合

- 昭和63(1988)年 ▶ 長男の幼稚園の地域委員になる(以降、幼稚園・小学校のPTA役員を複数経験)
- 平成 5(1993)年 ▶ 子どもたちの小学校のPTA副会長になる
- 平成 7(1995)年 ▶ 大宮地区 民生委員・児童委員(主任児童委員)になる
- 平成12(2000)年 ▶ 旭陽中学校「心の教室相談員」になる
- 平成18(2006)年 ▶ 大宮子育てサロン「ポップコーン」開設にかかわる
▶ 旭区民センター パソコン教室 講師になる
- 平成19(2007)年 ▶ 旭区民音楽祭 音響担当になる
- 平成26(2014)年 ▶ 大宮校下地域活動協議会 地域福祉部会長になる
▶ 「あさひ学び舎事業」学習コーディネーターになる

出身で、社会福祉や精神分析の勉強をしてきましたが、当時から「子どもたちが大人の犠牲にならないようにしたい」という思いがありました。学生時代のボランティアでは、里親の会や車いすが使える地図の制作などにも関わっていました。

また、これまで子ども向けの通信教育の添削指導の仕事を20年続けていて、子どもたちの学びをサポートして、励ましのメッセージを書き続けてきました。

そんな経験も今の活動とつながっているところがあります。

ーご経験を活かして活動をされているのですね。「あさひ学び舎事業」でのエピソードを聞かせてください。

はじめは、教える側のボランティアの体制をつくるため、学生時代からの友人や、通信教育の仲間、地域のつながりなどから声をかけてチームをつくりました。なかには「将来、学校の先生になりたい」という教育学部の学生も在籍しています。

ここではこれまでのネットワークが活きましたね。何かを始めるときには「知っている人を知っている」ことでどんどん広がっていきます。

通ってくる子どもたちは想像していた以上に幼くてかわいい。どこか大人に甘えたいところがあるのかな、という印象を受けています。教える側も焦らず一人ひとりのペースに合わせて教えるように心がけています。

学校に行きにくかったり、さまざまな事情を抱えた子どもが、学び舎には一歩踏み出して通ってくれるというケースもあり、この活動の意義を感じています。「僕には何もできないから…」と言う子もいますが、少しでも自信をつけてもらえるよう、子どもたちと向き合っています。

地域活動で 引っ込み思案な性格も変化

ー地域活動を通して、ご自身の変化はありましたか？

地域活動では自分が率先してやる

ことが多く、普段の生活では出会えない人たちとの新たな出会いがあります。もともと引っ込み思案な性格だったのですが、いつの間にか活動を通して自然に前に出られるようになっていました。学生時代の私を知っている人たちからすれば、信じられないような変化だろうと思います(笑)

ー最後に、より多くの人に地域活動に参加していただくためには？

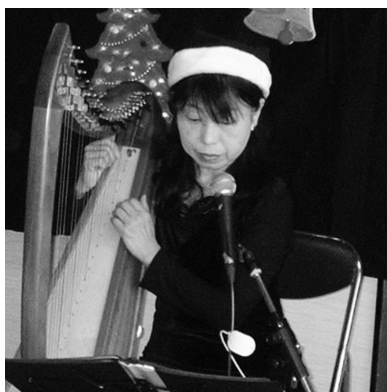
PTAは子どもが卒業すると、親も同じように卒業になるので、同じ人が続けることはできず、自然な循環が生まれます。

地域活動でも、同じ人が役を続けるばかりでなく、勇気をもって引き継いでいくことも大事なことでないでしょうか。

ーありがとうございました。



「旭ミュージックフェスタ」
プレコンサートで音響を担当



子育てサロンでハーブを演奏

取材を終えて

お話を伺っていくにつれて、過去の経験、さまざまな活動、その中で生まれたネットワークが相互につながっていると感じました。多彩な活動をされる中で「子どもたちへの思い」が常に芯にあって、今も向き合い続けているという姿勢が印象に残りました。

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

中央 区 河原 地域

ほ ろ じゅん こ
保 呂 純 子さん (37)

さ さ き なお み
佐々木 尚 美さん (39)

中央区河原地域で、子育てサークルや地域の行事・イベントなどで活躍中の保呂純子さん(写真右)と佐々木尚美さん(写真左)に伺いました。



一人ではできない。仲良く、絆を強く

知らない顔はいない！ 親も子もみんなが団結

— 子育て支援サークルのことを教えてください。

佐々木さん 地域の役員さんが、小さい子どもがいる家庭をまわって「子育て支援サークル」があると声をかけてくださったことで知りました。

私は嫁いできてからずっと河原地域。子ども3人の母親で、PTAの役もやらせていただきました。

保呂さん もう引っ越ししてしまいましたが、友人がここで子育てサークルに参加していて、誘ってもらったことがきっかけです。

私は4人の子の母親ですが、2番目の子どもが佐々木さんと一緒に学年で、子育てサークルで知り合いました。この辺りには、繁華街があり、はじめは外に遊びに行かせるのも心配だったので、サークルがあったことで救われました。

佐々木さん 子どもたちは自然と仲良くなっていくし、卓球や、夏場には滑り台が付いているプール遊びもできる。

保呂さん 毎週水曜日、学校が終わったら子どもたちが集まって、絵本の読み聞かせなどで面倒をみて

もらいました。ここは子どもたちが寄ってくるあったかい場所。特に夏休みは助かっています。外に出ればお金がかかるけど、ここでは電気代がかからない(笑)また、ここに来れば、みんながいる。家族にしゃべれないことでも、ここでは話せます。

— 地域のことを教えてください。

保呂さん 結婚してから、主人の実家であるこの地域に移り住みました。最初は未知の世界で正直、引っ越してくるまで不安でした。繁華街もあるので夜はネオンが付くと雰囲気が一変し、ここで子育てができるのかと。

佐々木さん 小学校への通学路も繁華街を通って行くんです。子どもの足で20分はかかるので、ランドセルを背負ったはじめの頃は筋肉痛になっています。

保呂さん でも、それで、子ども自身もだんだん強くなっていくんです。

佐々木さん 小学校では集団登校という形をとっていないから、子どもたちも自然と仲良く一緒に行くようになりました。すると、自然と親との連携もできます。また、人

が少ないこともあり、地域の人はPTAにほぼ名を連ねていますね。

保呂さん この地域は「まちなかの村」のようなところで、親も子も濃い関係が築け、和気あいあいとしています。親同士の団結もすごく、子どもたちの名前もほとんどわかります。子どもが悪いことをしたら、わが子のように怒ります。

子どもも地元で愛着があるのか、東京旅行に行くのと地蔵盆、どちらが楽しい？と聞けば、子どもらは「地蔵盆！」を選びます。それぐらい地域が好きで、地域のイベントに参加しています。

また「誰々ちゃんのお母さん」ではなく、下の名前で呼んでもらえることもうれしいかな。ここに住んでいることにとても感謝しています。

いきなり、実行委員に大抜擢！

— 37年ぶりに盆踊りを復活させたんですね？

保呂さん はい。大先輩もいらっしゃるなかで中心に企画をさせていただくことになり、正直すごいプレッシャーでした。地域の役員さんに「一回やってみたい」と言われて。

保呂純子さん・佐々木尚美さんの場合

- 平成19(2007)年 ▶ 佐々木さん 地域の子育てサークルに初めて参加
 平成21(2009)年 ▶ 保呂さん 河原地域に引っ越して来られる
 平成26(2014)年 ▶ 37年ぶりの河原盆踊り大会を開催
 ▶ 2人ともに子どもの小学校PTAの役員を務めている

佐々木さん いきなり実行委員ですよ～。地蔵盆など他のイベントも重なっていたため、青年部や女性会のメンバーはそっちで忙しかったわけです。誰か手伝ってくれそうな人おらんかな、ということで私たちがすることになって。

保呂さん 決して暇なわけではないんですが(笑)見たら、資料に私らの名前が入っていた！周りは先輩だらけでものすごく気を遣いましたが、二人だからなんとかがんばれました。

佐々木さん 会議はほぼ毎日。前例がなく、焼きそばを何個つくっていいのかすらわからない状態でした。誰にお伺いを立てればいいのか、そういうのも難しかったのですが、相談できる地域の人がいたのは心強かったです。金券もパソコンで自作して、印刷屋さんでつなげてもらいました。

保呂さん 毎日すごく忙しく、子どもを公園で遊ばせながら、打合せをしましたね。

保呂さん・佐々木さん でも盆踊り当日は、狭い公園に入りきれないほど人が集まってくれて大盛況でした。いろいろ売り切れ状態で反響も大きく、本当にやってよかったと報われました。

地域とともに成長していけたら

— より多くの人に地域活動に参加していただくためには？

保呂さん・佐々木さん 新しい人にも入ってもらわないと、とは思いますが、小さい子を抱えるお母さんの気持ちや大変さがよくわかるし、だからこそ声をかけづらいという理由もあります。

また子育てママさん自体が少ない地域なので、今は様子を見ながら…というところですかね。私たちが若いほうになるし、もっと成長しないと、と思っています。

佐々木さん 一人ではできないけど、保呂さんと一緒だからできています。今では、地域のイベントが優

先。家のことが後回しになっても、子どもたちのためになっている、と思えることが一番だと思っています。大変だけど、子どもたちが仲良くなり、親同士の関わりや絆が強くなれたことがうれしい。

保呂さん 私も佐々木さんと協力してここでつながっているから、何とかやっていける。

まちの拠点となっている、この公園と集会所がなかったら、逆に孤独だったかもしれません。

それに、地域活動は自分にゆとりがないとできないってこと。私も子どもが小学校に入ってからできるようになったし。だから子育て真っ最中のママさんも、今は見守ってあげながら、できることから一緒に顔の見える関係が築けていけたらうれしいなと思っています。

—ありがとうございました



子育てサークルの様子



夏祭りの準備

取材を終えて

お二人にお話を伺っていると「仲が良い」を通り越し、本当の家族のようでした。たくさんの役や行事で大変な中でも、楽しみながら地域のつながり、絆、子どもの成長を大切にして活動されているように感じました。また若い世代が少ない中、次世代の方にもきちんと目を向け、見守られているのが印象的でした。

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

此花 区 梅香 地域

さか のり あき
阪 憲 明さん (41)

此花区梅香地域のNPO法人「働楽」(どうらく/障がい者の福祉作業所)で働きながら、地域と施設とのつながりづくりや、地活協でも活躍中の阪憲明さんに、勤務先の作業所で伺いました。



できない理由を探すより、できる理由を探す

インタビュー

此花区

待っているだけでは何も始まらない

ーこの施設で働き始めたきっかけは？

私はもともと地域福祉に興味があり、専門学校で「コミュニティが福祉の基本」「上からの施策を待つより、ボトムアップで必要なものをつくる」という教えるを学び、いつか実践してみたいと思い描いていました。

卒業後、大きな福祉施設でリハビリテーション関係の部署を担当しました。規模の大きな組織で学ぶべきところはたくさんありましたが、地域との接点はもてないままだったのです。そんなとき、知り合いから「作業所を立ち上げるから、手伝ってくれないか」という相談があり、現在の作業所立ち上げに関わりました。

平成8(1996)年、働楽はこの近くのアパートの一室で開所しましたが、階段もあり、いろいろと不便なところがありました。転機は、道路に面したこの場所に引っ越したことです。

ーNPO法人 働楽のことを教えてください。

働楽は障がい者の働く場所の支援を目的とした福祉作業所です。代表は視覚に障がいのある者で、私は支

援員をしています。

受注しているのは、店頭に飾るのぼりに関する内職仕事ですが、作業内容はさまざまで、片手でできることなどの分業で進めています。メンバーは13人で、此花区内に住むメンバーがほとんど。ちなみに、私は平野区から通っています。

ー ひまわり喫茶はオープン66回を数えるとか。

きっかけは、仕事が暇なとき、作業所の仲間と一緒に「ふれあい喫茶」に参加したことでした。100円でお茶が飲めて、いろんな人が気軽に参加でき、自然に交流が楽しめる。「なんかいいなあ」と気になりました。施設で待っているだけでは何も始まらない！とふれあい喫茶事業の作業所版をやってみようと思い立ちました。

障がい者の福祉作業所は地域の理解が必要です。作業所で何をしているか、まだ十分に知られていない部分もあるので、地域の人たちに中に入ってもらい、メンバーと交流してほしいという思いがありました。

喫茶の運営やノウハウは「ふれあい喫茶」とほぼ一緒。すべて「ふれあい喫茶」に学ばせてもらいました。喫茶

のメニューは飲み物のほか、パウンドケーキやぜんざい、わらび餅など季節に応じて変えています。名称も「ひまわり喫茶」とし、開催は毎月第4土曜日、作業所の仕事が忙しくない限り、ほぼ定期で開いています。これだけ続けていると、常連さんとそうでない人というのが分かれてしまうので、一人で来てくれたお客さんにはなるべく私から話しかけるようにしています。

今では働楽のメンバーが外を歩いていると「今度は喫茶いつあるの?」「おいしかったよ」と声をかけられたり、近くに住む常連のおばあちゃんは喫茶がお休みだと知ると、がっかりされるぐらいです。通所施設は会社勤めと似たようなところがあり、利用者も行き帰りだけになってしまいがちです。ですから、こういう交流があると、すごくうれしいですね。周知のため、喫茶開催前にビラを配ったり、喫茶にお客さんがいないときには、前に出て呼び込みをしてくれる人懐っこいメンバーもいるんです。

ひまわり喫茶を訪れるお客さんが、地域の役をされていて。それがご縁で地活協の活動に携わるようになったのですが、そこでの口コミが、つながりを生んでいます。喫茶活動

阪憲明さんの場合

- 平成18(2006)年 ▶ ひまわり喫茶(地域ふれあい喫茶)スタート
 平成24(2012)年 ▶ 石鹸作りワークショップ開催
 (地域の子どもと大学生と当施設利用者による工作イベント)
 ▶ 梅香@ほーむ寄席開催(地域住民対象のお笑い寄席)
 平成25(2013)年 ▶ 写真ワークショップ
 (写真家の方と当施設利用者が撮影した写真をもとに公開トークショー)
 平成26(2014)年 ▶ 梅香さくらまつり(地活協主催)参加
 ▶ おしゃれ教室
 (障がい者向けのメイク講座/高校生、社協のボランティア、化粧品会社が協力)

がじわじわと浸透しつつありうれしいです。

地域に、新しいものを 受け入れる土壌がある

ー 福祉とアートを結ぶ活動にも熱心ですね。

梅香地域・四貫島地域は、ギャラリーや共同アトリエ、デザイン事務所などクリエイターが活動する場が点在しており、魅力的な作品展やイベントが多く企画されています。他の地域から移り住んでくるアーティストも増え、新しいものを受け入れる土壌のようなものを感じています。働楽でもアート展を開きましたが、障がい者の作品として見るのではなく、まっすぐなアートとしての評価をいただくことがあり、とてもうれしく感じるがあります。

働楽の作業所では、照明を変えてライブ演奏を開いたり、作業台を高座に大学の落語研究会をお招きしたり。高さや長さの組替えが可能なテーブルと、天井の高い空間を活かして、

さまざまなイベントを開催しています。企業の社会貢献事業で、高校のボランティアとメイクアップ講座を開いたときには、女性メンバーに大好評でした。

区社協にも「ひまわり喫茶ですが足りないから貸してほしい」に始まり、マイクがない、アンプを貸して、ボードはどこにある?など、いつもお世話になっています。

活動そのものが 地域に見守られている

ー より多くの人に地域活動に参加していただくためには?

地活協では、福祉・更生・環境・保健 部会に所属しています。恒例の「梅香さくらまつり」では、地域の若手が活躍する地車(だんじり)会に働きかけ、中学生の吹奏楽部とだんじり囃子のコラボが実現しました。また梅香という地名にちなんで、梅干しの種とばし大会ができないかと提案したところ、女性会の大先輩方が「それはおもしろい!」と後押ししてくだ

さったおかげで、新しいイベントが生まれました。この大会は、若い人も区長も参加してくださり大盛況。

イベントは一過性で終わるという言葉をよく耳にしますが、できる範囲の小さなイベントをつなげていくのだと思います。既存にあるものを、もっとおもしろくできないかと考える。常に話し合える場があることが、新しい人を受け入れることにつながるのではないのでしょうか。

何事もできない理由を探すより、できる理由を探す。それを応援してくれる諸先輩方にも感謝しています。

地域活動をするようになって、働楽の活動そのものが地域に見守られているようなあたたかさを感じています。

ーありがとうございました。



2014梅香さくらまつりの様子



上:おしゃれ教室開催時の様子
下:ひまわり喫茶の様子

取材を終えて

常に地域のいろいろなところにアンテナを張り、チャレンジを続ける阪さん。自然と多くの人が集まり、つながりができていく。笑いの絶えないインタビューからも、人を引き付ける魅力のある人柄を感じることができました。

座談会

世代をつなぐ
地域活動者に聞く



活動者の声から、 担い手育成のヒントを探る

平成26年5月から広報誌「大阪の社会福祉」の新コーナーとして始まった「世代をつなぐ地域活動者に聞く」では、地域活動の担い手育成や、参加促進をテーマに、地域活動者にスポットライトを当てた連載記事を計10回にわたりお届けしてきました。

さらに、これまでのインタビュー協力者に地域活動にまつわる想いを語っていただく座談会を企画。平成27年1月31日、大阪市立社会福祉センターで甲南女子大学人間科学部の鈴木大介准教授を進行役に9地域から9人が一堂に会し、意見を交換しました。

座談会に先立ち、市社協地域福祉課から9人の地域活動者をそれぞれ紹介。これまでのインタビューから「若い世代の人も案外、みんな自分の住んでいるまちが好きなん

んです」(佐藤さん)「仕事とは違った居場所や活躍の場があることが魅力です」(江村さん)「できない理由を探すのではなく、できる方法を探すようにしています」(阪さん)など各参加者の印象深いコメントを共有し、スタートしました。

地域活動っていいかも…

～私の気持ちのターニングポイント～

インタビューでは、はじめは「誘われて」「断ろうと思っていたけど」という方も多くいましたが、みなさん自発的な活動への思いや楽しさを大いに語っていただきました。その気持ちはどこでどのように切り替わったのでしょうか？

鈴木先生：それではまず、地域活動に参加したきっかけを教えてください。

乾さん：みなさんの記事を読ませていただくと、PTAが地域活動の入口という方が多いですね。私も子どものためにやってみようと思ったのがきっかけです。続けていくうちに知り合いや仲間が増え、自然といろいろな人との接点が増えました。「自然といいかも」が継続しています。

横井さん：私もきっかけはPTAの広報委員でした。新旧役員の交流会で「横井さん今度、家行くからこの顔を覚えておいて」と言われ。それから、夏の暑い日に何度も足を運んでくださり、断りきれなくて民生委員を受けることに。私は横浜育ちで、大阪のことを何も知らないまま引越してきました。知らない人が知っている人になるって、いいかもと思いました。

鈴木先生：もともと、地元ではなかったということですね。かなり雰囲気の違いがあるのでは？

横井さん：しゃべり方とか、まるで漫才を見て

座談会参加者9人

区	地域	名前	掲載号	一言紹介
住之江区	太陽地域	小川 宗治 さん	5月号	地元地域で生まれ育ち、子ども会会長を務める
西成区	南津守地域	乾 亮二 さん	6月号	地域社協副会長。仕事では介護事業所を経営
淀川区	木川南地域	横井 早苗 さん	7月号	横浜出身。子育てサロン、食事サービス等で活動
港区	築港地域	阪上真奈美 さん	8月号	地活協等で特技・関心を活かした活動を展開
東成区	東中本地域	佐藤 勇 さん	9月号	子育て世代で新たなふれあい喫茶を立ち上げる
鶴見区	榎本地域	中島 圭子 さん	10月号	地活協の広報委員。地域でSNSを導入
北区	菅北地域	江村三貴子 さん	11月号	PTA から青少年指導員、地活協の広報委員へ
旭区	大宮地域	齋藤 英里 さん	12月号	地域の子育て支援をはじめ、区の音楽イベントでも活躍
此花区	梅香地域	阪 憲明 さん	2月号	障がい者施設の職員。施設のある地域で活動中

進行・助言者：甲南女子大学 人間科学部 鈴木大介准教授

いるようで新鮮でした。(一同笑い)

乾さん：私も結婚を機に他の地域から移り住んできましたが、地域に長く貢献されている役員の方に声をかけてもらったときには、あてにされる喜びを感じましたね。

鈴木先生：小川さんが子ども会で活動をはじめたきっかけは？

小川さん：はじめは町会活動からですが、自分がポジティブで断らない性格だからでしょうか。自分が生まれ育った地域で活動していますが、遊んだ思い出がたくさんあり、子ども会も活発でした。どこかで、消えてしまった行事を復活させたいという思いがありましたから。

鈴木先生：活動者の世代は？



左：小川さん 右：乾さん

小川さん：私は33歳で、生まれた年にできたマンションで暮らしています。役員は60歳代の人が多く、私の実の親世代になります。50歳、40歳代がいなくて僕たちの世代ですね。友だちのおっちゃん、おばちゃんが多いので、やりやすい面がありますよ。自分が出た小学校の卒業式に来賓として並んでいる。なんか不思議な感じがします。

齋藤さん：私は、娘が幼稚園のとき、登園のお手伝いをしたのがきっかけです。大学時代は社会福祉を学びましたので、中学生の心の相談に乗ったりと、弱い人に寄り添うことを意識してきました。

阪上さん：私のはじまりは、子どもが小学一年生の時に「大阪市の人材バンクに登録しませんか？」というチラシを持って帰ってきたことです。好きな「お茶」と「お花」の講師で登録しようとしたら、校長先生から「まずはうちの学校でPTA主催の教室を開きませんか？」と言われ。それからいろいろと声がかかるようになり、まずは3カ月やってみよう、3年やってみようという感じでした。

鈴木先生：それは特技・好きなことを活かしてたってことですか？

阪上さん：はい。好きなこと、楽しいことから、続いています。「築港の歌」のCD制作も興味のあることから、リピート山中さん

に曲作りを依頼し、バザーで資金を集めました。(休憩中に披露)

中島さん：私の場合は、PTA役員の頃「地域の行事に参加して」と誘われるのが苦痛だったんです。青パト第一号という熱心な地域で、どこか敬遠しているところがありました。子どもが卒業する直前に地域から再度のお誘いがあり、「来たか」と思いました。これまで地域にお世話になってきたご恩返しです。

鈴木先生：なるほど。地域のお世話になってきたなかで、お子さんが小学校を卒業するという、絶妙なタイミングで声をかけられたわけですね。

佐藤さん：私も、PTAなどで活動を続けていくなかで、地域のみなさんが子どもたちをいかに愛してくれているかを感じ、恩返ししたいと思い、PTA主催講座の参加者に、ふれあい喫茶の無料券を配りました。それから、知り合ったお母さん方に声をかけ、新たな喫茶を立ちあげました。平日の午前中に開く時は、朝の見守り隊への感謝ということで、飲み物を無料サービス。見守り隊の方々は、活動後そのままの格好で喫茶に寄ってきます。

鈴木先生：仕事帰りの一杯という感じで、みなさんも喜ばれますね。阪さんは施設で喫茶をされているそうですね？

阪さん：施設で待っているだけでは何も始まらない。地域のふれあい喫茶に参加したことからヒントを得て、私たちの作業所でも同じような喫茶を始めました。そのねらいは、障がい者と地域のみなさんとの交流です。そこから思わぬつながりができ、喫茶で手品や音楽などを披露したいという人が出てきました。倉庫を改装した作業所が、今では舞台になったり、アートギャラリーになったりと交流が広がっています。

鈴木先生：既存の場に行くだけでなく、新しい場をつくるというのがおもしろいですね。“場の価値”をまわりが気づきはじめたということですね。



左：横井さん 中：阪上さん 右：佐藤さん

これがあったから続けて来られた ～継続の原動力・モチベーション～

地域活動の現場では、世代間の意識の違いや、子育て・働き盛りの世代ならではの活動の難しさを経験されてきた方もいらっしゃるかもしれません。それでも活動を続けてこられた原動力は何でしょうか？

鈴木先生：続いて「これがあったから続けて来られた」ということをお聞かせください。

阪上さん：やはり家族の理解が大切では。私がお声がけをする時は、夫婦仲がいかをなんとなく探るようにしています。私自身も家族の理解があったので、こうして続けられています。

齋藤さん：今は家庭を持っている娘から「お母さんがPTAをやってくれていてよかった」と、言われたことがあります。私には地域に居場所があるから、子どもが親の心配をしなくてよいみたいです。また、1期だけと思って受けた民生委員も、もう20年になります。

中島さん：私の本職はアパレルのパタンナー。「なら、デザインできるでしょ」と思われて…はじめにWordでロゴマークを作ったんです。それからチラシ制作を頼まれるようになり、illustratorを使うまでに。得意なことを活かしたというより、必要に迫られて得意になったような感じで。自分のプラスになることを地域のおかげで身につけることができました。

江村さん：日本一長い天神橋筋商店街が地元ですが、地域のリーダーは80代。50～60代が少なく、そのはるか下に私たちがいます。ボランティアでここまでされるのかという姿を目にして、私も何か貢献できればと思うようになりました。仕事とも家族とも違う、地域とのふれあいって楽しいですね。活動を通して、自分ができることが一

つ一つ増えていくのもうれしい。

中島さん：確かに50代は少ないです。はじめは、地域では広報の仕事自体がありませんでした。ゼロから手探りの状態ではじめたため、自由に挑戦することができました。Twitterも開設してから事後報告でしたが…ありがたいことに会長は「こんな広報をしている」と“広報の広報”をしてくれています。

鈴木先生：自由にさせてもらえる。任せたくて見守り、応援してくれるとは心強いですね。

中島さん：そうすると、走るしかない(笑)冒頭の紹介にあった阪さんの「できる方法を探す」というのは、いい言葉ですね。覚えて帰ります。

江村さん：私も中島さんと同じように広報委員ですが、ホームページの立ちあげ準備中なのに、すでに地域でPRしてくださっています。やったら、やっただけほめてくれる。

鈴木先生：なるほど、喜びをくすぐってくれたんですね。



左：中島さん 右：江村さん

どうやって世代をつなぐ？

地域活動に関わる人の固定化・高齢化が課題となっている中で、参加者や担い手が循環し続けるためには、どのようなことを大切にしていけばいいのでしょうか？

鈴木先生：それでは、今回の企画タイトルにもある「世代をつなぐ」をテーマに、みなさんの経験から、お話を聞きたいと思います。小川さんの記事に「声をかける時は、“敷居は低く”」とありましたが、具体的にはどんな感じでしょうか？

小川さん：まず「お子さんが子ども会に入りたいと思っていたら、ぜひ入れてあげてください」と言っています。入らない理由を聞いてみたら、共働きでお手伝いできないからアカンと。そんな場合は「親御さんのお手伝いはいいから」と敷居を低くしてお誘いする。



左：齋藤さん 右：阪さん

その後、わが子のためなら顔を出そうと思ってくれるわけです。

鈴木先生：一步踏み出せない方にどのようにアプローチされていますか？

小川さん：子ども会でバーベキュー大会をする時には、親も顔を出してくれる。その時に目星をつけているんです。いきなり「役員」をお願いすることはむずかしいので「今度は一時間でもいいから手伝ってもらえませんか」と声をかける。すると、中には半日手伝ってくれる人も出てくるわけです。

阪さん：梅香は若手のアーティストが集まってくる地域です。大学生と話す機会も多いですが、地域活動に参加したいという熱いものは持っている。ただ、そういうものに関わるのが慣れていないだけなんです。昨年、地域のさくらまつりで梅香という地名にちなみ「梅干しの種飛ばし大会」ができないかと提案したところ、そのイベントが実現しました。若い子のアイデアが形になると、ぐっとのめり込んで入ってきてくれます。僕らがどうやって若い人のサポートができるかが大切なのではないのでしょうか。

鈴木先生：若い世代も地域のことを考えている、入りたがっていると。やりたいことをダメだと言われるのと、支えられるのではまったく違いますね。佐藤さんも、若い人も案外自分の地域が好きだといわれましたね。

佐藤さん：はい。子育て世代の人も、ぐぐっと入ってこられるのは嫌だけど、ちょっとだけならいいよというのがあるようです。こちらからアクションを起こして無反応であっても、具体的にお願いしてみると、のってくれることがあります。

阪上さん：私の地域では、地活協で広報誌を配る有償活動の仕事を受けたので、お声がけしたところ、新たな担い手が生まれました。

鈴木先生：今までとは違った地域活動の形が増えてきたということですね。乾さんは世代間の調整役とおっしゃっていましたが、いかがですか？

乾さん：いきなり地域に「若い世代の担い手を」というのは、むずかしいと感じています。行事の際に日頃、見かけないお父さんを目にしたときには、声をかけるようにしていますが、せっかく来てもらっても、手持ち無沙汰になってしまうことも。そんなときに積極的に声をかけたり、終わってからのあと一步のフォローがどれだけできるかが大事ではないでしょうか。

鈴木先生：最後に、みなさんのお話から、地域活動への参加・参画を促すヒントについて、「きっかけ」と「継続」から考えてみたいと思います（＝表）。まず「きっかけ」については、入ったらどうなるかわからないという人も一步踏み出しやすいように敷居をぐっとさげる。地域でいろいろな人の思いに触れるなかで生まれる愛着も重要ですね。また、みなさんの経験から、子育てや行事参加を通して、地域の支えに気づき、この地域の一員であるという当事者性が芽生えるということを感じました。そうして始めた活動を「継続」する秘訣として、みなさんやりがいをもってうまくつくり出しておられる。活動で創意工夫が認められると、その気持ちはさらに加速します。一方、受入側としては、勇気を振り絞って入ってきた人をフォローする、新たな提案を応援する、といった地域の度量も大切ですね。みなさん、今日はありがとうございました。

き っ か け	継 続
敷 居	や り が い
愛 着	創 意 工 夫
当 事 者 性	地 域 の 度 量

世代をつなぐ仲間へのエール

～市内各地域の若手活動者に伝えたいこと～

今回インタビューにご協力いただいたみなさん以外にも、地域活動に取り組む若手や、世代をつなぐ活動者たちはたくさんいるはず。同志に伝えたい思いを、ワンフレーズでフリップに書いて共有しました。



〔後列左から〕

佐藤さん：趣味であり究極の自己満足

阪 さん：楽

小川さん：前向きに

乾 さん：やってみよう!!いい事いっぱい

鈴木先生

〔前列左から〕

齋藤さん：チョイスとチャレンジ

江村さん：いっしょに楽しもう!

横井さん：大丈夫。何とかなるから!

中島さん：明日の笑顔のために!

阪上さん：なんとかなるよ

甲南女子大学 人間科学部

准教授 鈴木 大介さん

大阪市社協が設置する地域福祉活動推進委員会の専門部会である地域福祉活動支援部会の委員。市内複数区で、地域福祉に関する研修講師や計画策定のアドバイザーなどを務める。地域活動の参加・参画を促す要因に関する調査研究に取り組む。



地域活動への参加を促す要因や継続を支える要因にはさまざまなものがあります。その中でも若手の活動者と関連するポイントについて、インタビュー&座談会からみてみましょう。

1 活動参加を促したポイント

まずは活動参加を促したポイントですが、キーワードとしては「当事者性」「愛着」「自分ができること・興味があること」「役に立てるといううれしさ」「敷居の低さとフォロー」などをあげることができます。

多くの方が自分の関係する分野や問題から活動を始めていました。自分の子どもに関することなど、自分自身がその分野の当事者となることで、活動の入口に立っていたのです。既存の活動者の活動をみの中で、今まで自分たちを支えてくれた方々の姿を目の当たりにして「地域にご恩返しを」という想いをもたれている方が多いのも印象的でした。今ある活動が次世代の方々の地域への愛着をもたらし、次の活動へとつながっているということでしょう。

また新しい方を誘われる際には、誰もが活動に参加しやすいように参加のハードルを下げる工夫や「踏み出した勇氣」をサポートするという

ことも語られました。日頃、見かけない方を目にしたときには積極的に声をかけたり、終わってからも「あと一步のフォロー」をどれだけできるかが重要になるということです。

2 活動を継続できた背景

次に活動を継続できた背景をみると「創意工夫」「やりがい」「地域活動の先輩方の受け入れ・サポート」「スキルアップの実感」「居場所」「つながり・関係性」などがあげられます。

印象的だったのは、活動をよりよくするために工夫を凝らしたり、新しい活動を生み出す楽しさが「継続の原動力」となっていた点です。実現困難なことがあっても諦めるのではなく「できる方法を探す」といった創意工夫を楽しんでいること、そこから新しい動きや活動が生まれているということ、それらが活動の実感や手ごたえにつながり、やりがいの蓄積を生んでいました。

3 思いをつなぐ調整役の存在

地域活動の担い手に関しては、若者の地域離れや地域活動との乖離が叫ばれています。しかし今回みて

きたのは「実は若い人たちも何かしたいという想いは持っている。同時にさまざまなアイデアを創出している」という事実です。そしてそれらのアイデアが実現すると、地域活動にグッとのめり込んでくるという実態です。

ただし、そこで重要となるのは「調整役の存在」です。確かに地域活動に参加したいというアツい思いを持っている若手はいます。しかし、そのような活動に関わることに慣れていない場合が多く、また同じ方向を向いていても、既存の活動者と発想や価値観が違うため、すれ違いが生じてしまう場合があります。そこで世代をつなぐ（両者の発想や考え方の橋渡しをする）調整役が重要となってきます。

調整役がいることで、若手活動者の活動環境や活動のしやすさが格段にあがると考えられます。また同時に同年代の人のつながりがあることで気やすさと心やすさが生じているという関係性の重要さも浮かび上がってきました。

次世代の地域活動の担い手育成は、多くの地域で共通する課題です。今後も、今回のような企画を実施・活用し、地域での実践がより豊かになる後押しが行われればと思います。

地域活動の住民意識調査から

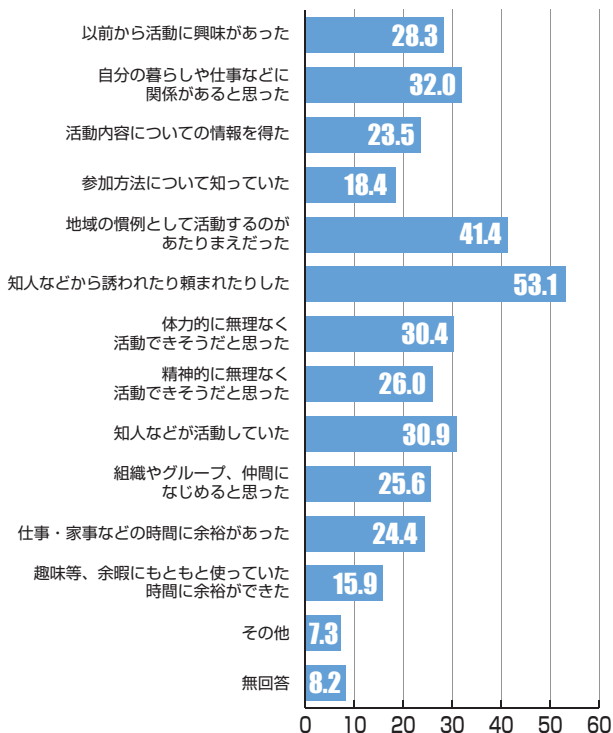
「地域活動のこと、 みんなどう思ってる？」 「実は興味がある人も多い！？」

平成25年に実施した住民意識調査から、地域活動・ボランティア活動の取り組み状況、参加のきっかけ、魅力に関する結果を紹介します。

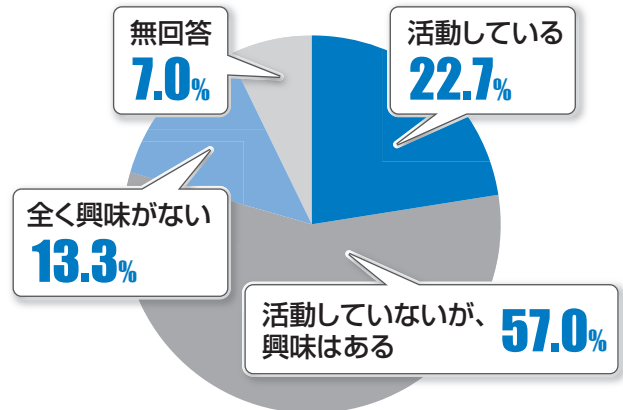


地域活動をしている人に聞きました

Q. 地域活動を始めたきっかけは？ (複数回答)



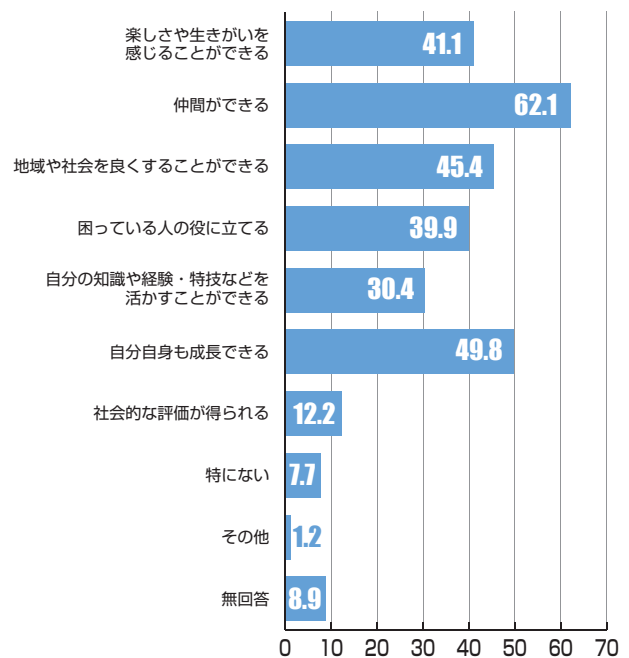
Q. あなたは地域活動・ボランティア 活動をしていますか^(※)



※地域団体の活動に加えて、NPOやボランティアグループなどの活動、企業・商店の社会貢献活動などを含む。

(活動の有無を問わず) みなさんに聞きました

Q. 地域活動の魅力は？ (複数回答)



「大阪市における地域課題・地域活動に関する住民意識調査」について

大阪市社協を含む共同体が、大阪市委託事業「新たな地域コミュニティ支援事業」(平成24年10月～26年3月)の一環として平成25年1～2月に実施。市内北ブロック5区(北区・都島区・福島区・淀川区・東淀川区)・南ブロック5区(阿倍野区・住之江区・住吉区・平野区・西成区)在住の成人を対象に、無作為抽出の郵送アンケートをおこないました。

※上記結果は、両ブロック(計10区)を合わせて集計したものです。 <総配布数24,217件/有効回答数6,838件/回収率28.2%>

各区社会福祉協議会 一覧

(((「世代をつなぐ地域活動者に聞く」は各区社会福祉協議会の協力のもと、
地域活動者へのインタビューを実施しています。)))

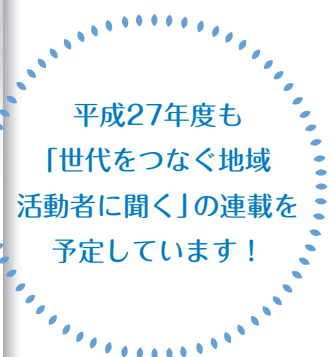
北 区	北区神山町15-11	6313-5566	東淀川区	東淀川区菅原4-4-37	6370-1630
都 島 区	都島区都島本通3-12-31	6929-9500	東 成 区	東成区大今里南3-11-2	6977-7031
福 島 区	福島区海老江6-2-22	6454-6330	生 野 区	生野区勝山北3-13-20	6712-3101
此 花 区	此花区伝法3-2-27	6462-1224	旭 区	旭区高殿6-16-1	6957-2200
中 央 区	中央区上本町西2-5-25	6763-8139	城 東 区	城東区中央2-11-16	6936-1153
西 区	西区新町4-5-14	6539-8075	鶴 見 区	鶴見区諸口5丁目浜6-12	6913-7070
港 区	港区弁天2-15-1	6575-1212	阿倍野区	阿倍野区帝塚山1-3-8	6628-1212
大 正 区	大正区小林西1-14-3	6555-7575	住之江区	住之江区御崎4-6-10	6686-2234
天王寺区	天王寺区六万休町5-26	6774-3377	住 吉 区	住吉区浅香1-8-47	6607-8181
浪 速 区	浪速区難波中3-8-8	6636-6027	東住吉区	東住吉区田辺2-10-18	6622-6611
西淀川区	西淀川区千舟2-7-7	6478-2941	平 野 区	平野区平野東2-1-30	6795-2525
淀 川 区	淀川区三国本町2-14-3	6394-2900	西 成 区	西成区岸里1-5-20	6656-0080

区社会福祉協議会では、身近な地域での福祉活動や、ボランティア活動を支援しています。

広報誌 「大阪の社会福祉」の発行

昭和25年の創刊以来、大阪市社会福祉協議会が毎月定期的に発行し、市民や社会福祉関係者などへ、各区・地域における地域福祉推進の取り組みや、その時々福祉情報をお伝えしています。

上記24区社会福祉協議会でも配布しており、本会のホームページからも閲覧できます



M e m o

地域活動の魅力を伝える情報誌「世代をつなぐ地域活動者に聞く」

発行 平成 27 年 3 月
社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町 12-10
TEL.06-6765-5601 FAX.06-6765-5605
ホームページ <http://www.osaka-sishakyo.jp>

※本冊子の各インタビューページに記載
している地域活動者の年齢は平成27年
3月31日時点のものとなっています。

私たちのめざす地域

「つながり・支えあうことができる福祉コミュニティ」

私たちは、身近な地域の中で、一人ひとりの生活の困りごとや生活のしづらさに関心を持って、住民同士が話し合い、新たな担い手の参加・協働を積極的にすすめることにより、**互いにつながり・支えあうことができる地域**をめざします。



私たちが、これまで自然とよりどころにしてきた家族や隣近所のつながりが薄れつつある中で、生活の困りごとや生活のしづらさを抱えた人たちは孤立しやすくなり、その課題は複雑・多様化しています。

これらの課題は特定の人たちだけの問題ではなく、誰もが人生のさまざまな場面で、支援が必要となるかもしれません。一方で誰かが、できる範囲での「サポート役」に回る可能性を持っています。

大阪市内の各地域では、高齢者食事サービス・ふれあい喫茶・子育てサロン・見守り活動などの地域福祉活動を、長年に渡って地道に積み上げてきました。また、平成18年度からは、各区において多様な組織・個人の参画と協働による「地域福祉プロジェクト」を展開してききました。そうした取組みによって、脈々と受け継がれてきた、また新たに結んできた、人と人との「つながり・支えあい」こそが、地域の財産であり、公的サービスだけでは実現できない豊かさを生み出し、一人ひとりの暮らしを支えています。

今一度、地域福祉活動の意義を再確認し、これからも取組みをすすめていくうえでよりどころとなるよう、「大切にしたい6つの視点」と、それらに共通するポイントとして「3つのええ要素（栄養素）」をまとめました。

大切にしたい6つの視点

1 一人ひとりの暮らしを大切にすべくみをつくる
【発見と見守り・権利擁護】

身近な地域で、高齢者・障がい者・子ども・生活困難者、引きこもりなど、生活のしづらさを抱える人たちに気づき、見守り、総合的な相談窓口と連携することが、事態の深刻化や権利侵害を未然に防ぎます。一人の暮らしを守るとともに、同様の生活課題を抱える人たちを支える“しくみづくり”を意識することが大切です。

2 同じ課題を抱える人たちの中心としたつながりをつくる
【当事者を核にした組織化】

同じ課題を抱える人たちが仲間と出会い交流する場面をつくることは、互いにサポートしあい、生きる力を高め、意見を表明することにつながります。支援者同士が連携するだけでなく、当事者の人たちの中心とした支えあいのネットワークをつくることで、一人ひとりの自立と社会参加のステップへとつながります。

3 多様な人・組織の強みを生かした活動参加と協働をすすめる
【市民活動・ボランティア活動】

多様な個人、企業やNPOなどの組織が、それぞれのもつ特性を活かして、地域とつながり、互いの強みを活かした協働を生み出すことによって、相互に補完しあいがら、住民ニーズをキャッチし、それに対するアクションを多彩に展開することができ、その手法も広がっています。

4 福祉の心を育み学びの機会をつくる
【福祉教育・ボランティア学習】

子どもから大人まで、一人ひとりが尊重され、地域で誰かが助けられることと共に生きるための福祉の心を育む機会を重ねることが、福祉課題への関心を高め、担い手を育成・育成し、活動を活性化することにつながります。そうした学びの場を継続することが、住民が主体となって地域の福祉課題を協働で解決する土壌をつくります。

5 地域と社会福祉施設・福祉サービス事業者の交流と連携を強める
【社会福祉施設・事業所との連携】

社会福祉施設や福祉サービス事業者も地域の一員として、地域との交流を図り、施設・地域双方がもつ資源の相互活用などをすすめることは、互いの理解を深め、協働による課題解決の可能性を広げることにつながります。また、可能性を越えて施設同士の連携の場をつくり、複雑・多様化する福祉ニーズへの対応力を高めることが大切です。

6 災害時に誰も取り残されない地域をつくる
【防災・減災に向けてのつながりづくり】

日常の地域福祉活動のおかげで、生活上の配慮が必要な人を把握し、災害時にどんなサポートが必要なのか、誰が中心となってサポートできるかなどをみんなで作る、情報共有し、また、当事者参加型の訓練などを重ねることで、地域の防災力が高まります。地域外への支援者をどう受け止めるか、【受援力】もキーワードです。

3つのええ要素（栄養素）

どの視点を考えるうえでも「ニーズ」「情報」「担い手・資源」がベースになります。

ニーズ

住民の生活課題から「ニーズ」が生まれ、地域福祉活動につながります。身近な人の生活の困りごとなどに寄り添い、ときに代替するともに、今は見えていないニーズを意識することも大切です。

情報

サービスを受けるにも、関心を広げる、活動参加を促すにも「情報」がカギとなります。必要な情報をわかりやすく届け、共有する手段を工夫していきましょう。

担い手・資源

地域福祉活動をすすめるときには、現在関わっているだけでなく、いるいるな「担い手」・つながりあい、場所や物品、資金など地域にある「資源」を発掘し、活かしていきたいと思います。

私たちの手でつながり・支えあいの地域をつくる

— 地域福祉活動をすすめるための大切な視点 —

活用にあたって



現在取り組んでいる活動の再確認・ふりかえりや、今後の活動の方向性を話し合う際にご活用ください。

取り組んできた活動があてはまる視点を考えて、3つの要素と照らしあわせてみたり、区や地域の中で6つの視点にあたる活動はどのようなものがあるかと話し合っていたことも一つです。

一つの取組みには、複数の視点が含まれていることも考えられます。

例えば、どんな場面で

- * 団体・グループでこれまで取り組んできた活動をふりかえるときに
- * 地域福祉活動についての学びの場面をもつときに
- * これまで推進してきたアクションプランを見直すときに
- * 区や地域においてこれからの活動を話し合うときに（地域福祉活動計画の策定など）

